“でんぐり返しプロジェクト”

「銀行員だったからこそ見えた 日本の精神病院の不可解、 不条理、非常識」

2017年1月11日

於：国際医療福祉大学大学院
青山キャンパス

杏林大学　長谷川　利夫

自己紹介

昭和39年（1964年）　東京都生まれ
昭和55年（1980年）～昭和58年（1983年）
國學院大學久我山高校
レスリングに没頭
憲法問題に目覚める
昭和58年（1983年）～昭和62年（1987年）
國學院大學法学部法律学科政治学コース
ゼミは西洋政治思想史
昭和62年～1999年
第一勧業銀行（現 みずほ銀行）









私が抱いた不可解、不条理、非常識

・なぜ、職員が患者のことを「ちゃん」付けで呼ぶのだろう？

・なぜ「病院」なのに、運動会やお花見会があるのだろう？

・なぜ職員は、自らの権力性に気づかないのだろう？

・なぜ医療監視、実地指導などを日程調整してやってくるのだろう？

・なぜ、「私たちは民間病院だから」と言うのだろう？

• なぜ入院患者さんたちは退院しないのだろう？

「ちゃん」付けの原因を考えてみると・

「精神」の障害、病気をもった人を見下す意識。
見下すことで自分を守っている職員の存在。

・長く接していて「慣れ」てしまっている。

・外部からの眼に全くさらされない。
（「市場」がないので実質的に「退場」がない）

⇒要は、病院も職員も市場原理によって「淘汰」されることがない。

運動会、お花見会

- 「退院」させる気がない。
- ある種の「施し」としての「医療」
  （ここにも、「精神」の病気への見下しの感情が含まれている）
- 摩訶不思議な「お花見会」

職員の「権力性」

- 閉鎖病棟の「鍵」をジャラジャラ鳴らしながら歩く職員
- 「監禁」と何が異なるのだろうか、という疑問
- ある医師の言葉

これが医療監視？実地指導？

「日程調整」して監査がやってくる

精神病院は「民間」病院なの？

- 確かに国や地方自治体が運営していないから「国公立」ではないかもしれないが、市場原理が働かないものを「民間」と言ってよいのかという疑問